

「中国」を書く方法

—— 武田泰淳「月光都市」論 ——

周 希 瑜

はじめに

武田泰淳「月光都市」は一九四八年一月、『文芸復興』^①（札幌交友社）に発表され、後に一九四九年一月に同名の単行本『月光都市』（白井書房）の巻頭に収録された。同時代からあまり注目されておらず、先行研究は少なかつたが、近年は木田隆文により、「月光都市」^③からみた武田泰淳の上海体験を再検討する研究が進んでいる。この木田氏の研究において、「月光都市」は、従来知られたより複雑な発表経緯を持つことが判明した。冒頭の一段落を除いて、「月光都市」の前半部分は、既に「中秋節の頃（上）」という題目で、戦時下の中国上海で刊行された日本語文芸雑誌『上海文学』^④（一九四五・五月号）に発表されており、後半部分は『上海文学』の廃刊によって同誌上で発表が中断されていたのである。木田氏は日本統治下の上海という同時代文脈の中で、現地で発行されていた雑誌『上海文学』に掲載された「中秋節の頃」の意味を捉え直し、日本の文化統治政策に対して武田泰淳の批評性を高評価していた。しかし、日本の敗戦によって統治が終わった後、戦後という時点から戦中を思い出すという回想体からなる

冒頭の加筆によって再構成された「月光都市」の発表意図と本文への分析は、必ずしも十分になされたとは言えない。

「月光都市」が発表される直前、『中国文学』第百号（一九四七・十）では、武田泰淳の提案で行われた座談会「東方文学における世界性と地方性」に関する記事が掲載された。そしてこの座談会に続いて「異国放浪」という評論も同時に発表されていた。戦中の「中秋節の頃」を戦後に「月光都市」と改稿し、改めて発表したことは、『中国文学』復刊号における武田泰淳の問題意識と無関係ではない。本稿は、敗戦直後に、政治的かつ便乗的に「中国」紹介の言説が溢れたという同時代状況の中で、従来の「支那趣味」で書かれた「中国」に関する作品に触れつつ、雑誌『中国文学』復刊号における武田泰淳の言説に着目し、「月光都市」を再検討する試みである。

一、「中国文学」復刊号における武田泰淳の問題意識

戦前、中国文学研究会は竹内好と武田泰淳を中心に結成され、同会の機関誌『中国文学月報』、後に『中国文学』の誌面上で、「中国文学」や「文化」など多方面にわたって論考が展開されて

いた。だが、この中国文学研究会は竹内好の主導で一九四三年一月に解散され、機関誌も同年の三月に第九十二号をもって終刊となった。そして戦況に伴って、研究会の同人達は「内地」、「外地」に散らばっていた。敗戦直後の一九四六年三月、日本国内の同人実藤恵秀、千田九一、岡崎俊夫らは、機関誌『中国文学』を復刊することによって、中国文学研究会の復活を宣言した。一九四六年六月発行の『中国文学』第九十五号で、「旧同人武田泰淳が三月下旬、上海から帰つた」という編集後記に記されたように、武田泰淳の復帰は予告されており、次号の誌面からその作品がしばしば掲載されることになった。上海からの引き揚げの直後、既に中国文学研究会に関与していたことが窺われる。

復活した中国文学研究会は合計三回の座談会を開き、各内容は『中国文学』の誌面に掲載されていた。ここで特に注目しておきたいのは、『中国文学』第百号（一九四七・十）に掲載された第三回目の座談会の内容である。題目「東方文学における世界性と地方性」は武田泰淳によって提案され、大野忍、岡崎俊夫、飯塚朗、竹内好など、中国文学研究会の同人のみで行われていた。「中国文学がローカルなものとして日本人に受取られる」、「日本文学があまりに私小説的であって」、「略」中国文学が伝統を絶切つて世界的なものの中へ溶け込んでゆく」といった同時代の諸説に対して、武田泰淳は「世界性」と「地方性」の問題を考え直す必要があると主張していた。全体の内容は各部分のキーワードごとに、十五節に分けられている。具体的な作家と作品を挙げながら、同人達は中国文学と日本文学における「世界性」と「地方性」を詳しく論じていた。「旅行者の感覚と文学の実態」の一節の中

で、「日本の作家の中国を書いた作品」について、武田泰淳は横光利一『上海』と阿部知二『北京』に言及し、「日本の今までのものは文学者の旅行者の感覚」と批判する一方で、林語堂^⑩に対して、「そのローカルな部分を世界に広めることによって、彼は彼自身の世界性を獲得した」と高い評価を与えていた。

この座談会で、「世界性」と「地方性」への理解に関しては、同人達の間に変な意見が示されたまま、結局まとまった結論が出されていなかった。その原因を考える上では、座談会の記事に続いて誌面に掲載された泰淳の評論「異国放浪」に注目する必要がある。以下はその一部を引用する。

一度味はつた大陸の智慧の実を忘れかねるとは、文化の問題、文学の問題として、氣がるい希望よりは、むしろ暗い未来を物語るのではないか。〔略〕

異国に住みつき、住み込むことのむづかしさ。異国の人物風景を愛し、うけいれることのはかなさ。軍帽と水筒でなくとも、日本の作家たちはこれを身にしてみてゐた。引揚季節の中に私たちは、なおのことこの種のうつろひを幅ひろく感ずる。

鋭利な観察、豊富な官能、ゆつたりとした詩情、日本の読者には楽しいものを、彼等にあたへてくれた。〔略〕かつてあたへられた楽しい中国風の夢が、すぐさまこの冷厳な引揚事実と、一つ秤ではかれないであらう。〔略〕

私は終戦後も、フランス租界でしばらく暮した。〔略〕龍之介、潤一郎、春夫の旅行者の味はひ方、李太郎の定住者の

幻想が、いちおう引揚の運命に遭つた以上、新しい智慧の果
実の料理法が必要とされてゐるかもしれぬ。「略」日本文学
に世界性有りやなしや、中国文学に学ぶべき点有りや否や、
それら机上の文化論とはなれて、世界の夕暮どき、近代の雨
風に打たれて、人知れぬ漂泊放浪をつづける、新しい詩人は
もはや生まれてゐるのではないか。その悲しみは日本的でも、
その足どりは、いつか世界の裏街の土をたどり行く者。その
者たちが再び中国を、また世界を書き得るのは何時の日のこ
とであらうか。

上記の引用から示されたように、引揚の季節にあたり、「かつ
てあたへられた楽しい中国風の夢」という未練により、「大陸の
智慧の実を忘れかねる」という「文化」、「文学」の問題に對して、
武田泰淳は強く批判していたことがわかる。「旅行者の味はひ方」
や「定住者の幻想」という従来の日本作家の「中国」の捉え方と
異なり、敗戦、引揚の経験を踏まえた上で、「新しい智慧の果実
の料理法」の必要性を泰淳は主張していた。それは過去の「フラ
ンス租界」の現地体験を生かし、その「地方性」を書くことによつ
てこそ、「世界性」のある文学が実現されうるという武田泰淳自
らの課題であると言える。まさにこのような背景のもとで、戦
中の「中秋節の頃」が改稿され、「月光都市」が発表されるに至つ
たのであろう。

二、「支那趣味」への抵抗

従来の日本作家による「中国」の捉え方はどういうものであつ
たかということについて、改めて確認しておきたい。先に引用し
た「異国放浪」(『中国文学』第百号)において、武田泰淳がまず
言及した「旅行者」の芥川龍之介は、一九二一年三月下旬から七
月中旬にかけて、大阪毎日新聞社の海外特派員として中国に赴き、
上海、杭州、蘇州、南京、長沙、北京など各地を視察した。帰国
後、執筆した「上海游記」を最初に『大阪毎日新聞』(一九二一・
八・十七・九・十二)に連載し、後に他の中国旅行記とともに、
単行本『支那游記』(改造社、一九二五・十一)としてまとめら
れた。続いて泰淳が言及した谷崎潤一郎と佐藤春夫は、いずれも
芥川に先立つて、中国を遊歴し、その後中国関連の作品を数多く
発表していた。このほか、「定住者」の木下杢太郎は一九一六年
から中国の東北に渡り、五年間その地で生活していた。定住した
経験を踏まえて、中国の各地を旅行しながら紀行文を発表し、中
国の説話文学、怪奇小説の翻訳も取り扱っていた。以上の文学者
の動向に代表されるように、同時代の文壇では、「大正期の日本
文壇に急速に流行し始めていた(支那趣味)」という風潮^[1]が現れ
ていた。この「支那趣味」ブームは、当然次世代の中国文学研究
会の同人達に多大な影響を与えたのである。中心メンバーの竹内
好は後年、次のように回想をしている。

谷崎さんは若いころからシナ趣味があつた。「略」私たち

年輩のものは、中国のイメージをつくる上に谷崎さんの影響を蒙っている。谷崎さんばかりでなく、同時代に佐藤春夫さんもいる。谷崎、佐藤とかざえると、木下杢太郎の名も逸するわけにはいかない。芥川龍之介もほぼ同時代である。

この人たちによってつちかわれたイメージが、私の中国観の根底にあるということが、前代と後代から自分を分ける世界的特徴になっているように思う。そのイメージに抵抗することを通じて自分なりのイメージを形成してきたのだから、私の中国観は根本において大正文学によって規制されている。¹²⁾

このような竹内好の証言は、まさに『中国文学』第百号に示された武田泰淳の問題意識を反復している。上海は芥川が最初に足を踏み入れた中国の地であり、彼の中国体験の原点とも言える。「上海遊記」は、芥川を始めとした当時の多くの日本人作家が目撃した「上海」、或いは「中国」へのイメージの反映でもあった。武田泰淳は自ら「上海」を書く際、意識的にも芥川龍之介「上海遊記」に対し、特に目を向けていたであろう。従って「月光都市」の中で、先行した「イメージに抵抗することを通じて自分なりのイメージを形成」という武田泰淳の姿勢は改めて問われる必要があるだろう。「月光都市」の舞台は日本統治下の上海に設定され、作品中の地名はすべて当時のままの実際の地名であった。日本人男性主人公の杉は「支那文化」の研究者であり、「对中国文化事業」に従事するという、武田泰淳自身を思わせる人物設定がなされた。物語の展開も、杉の視点が焦点化され、上海現地で出会った「異国」文化を中心に語られる。「月光都市」

はルポルタージュ的な小説としても捉えることができる。¹³⁾ 大正時代から「支那趣味」ブームの中で日本文学者が描いてきた「上海」に対して、武田泰淳はどのような形で抵抗の姿勢を示していたのか。以下は特に芥川龍之介の「上海遊記」にも描かれていた「フランス租界」、「徐家匯」などのスポットに注目し、「月光都市」に現れた「上海」という空間を改めて論じてみたい。

三、フランス租界

杉は「フランス租界のはずれ」にあった日本人の博士の家に下宿していた。「隣家のドイツ人の花園の朝鮮朝顔」、「外人の邸宅ばかり並ぶ閑静な一角」、「建物も街路も住民もほとんど支那らしい趣がなかった」という描写には、植民地支配によってもたらされた多国籍性が刻印されていた。上海は、アヘン戦争から始まった列強の植民地主義的暴力が作り出した都市である。イギリスは中国清朝政府との間に主権の一部を失った不平等条約を結んで、一八四五年に最初の租界を上海に設置した。それから上海には一八四九年にフランス租界と一八五三年にアメリカ租界が誕生し、後にイギリス租界とアメリカ租界が合併し、共同租界が成立した。そして日本の中国進出に伴い、急激な日本化の進展によって、共同租界のうち虹口を中心とする地区は、日本人居留民が多くなり、実質的な日本租界となった。¹⁴⁾ 木田隆文は「虹口に、日本人であるはずの杉は足を向けることがない」ということに注目し、「日本統治下の上海にあつてしかるべき（日本の支那）」というべき空間を排除した武田泰淳の姿勢を指摘した。しかしその一方で「フラ

ンス租界」を武田泰淳が選択し、書くことの意義も無視できないだろう。

一九四一年十二月、太平洋戦争の開戦、日本の対米英宣戦より、日本軍は上海共同租界に進駐し、英米施設を接収し、全区域を占拠した。フランスは一九四〇年六月にドイツに降伏したため、上海フランス租界は進駐の対象外であった。¹⁵ しかも、高綱博文の論述によれば、日本軍の占領下に置かれたにもかかわらず、上海租界では「国際都市としての外観を保持し租界行政を基本的に存続させる現状維持政策をとった」という。¹⁶ つまり、当時日本軍の進駐の対象から外れたフランス租界は、一定程度の中立性が確保され、特別な存在であったとも言えよう。「月光都市」の中で、武田泰淳は「フランス租界」について、次のように記している。

その時、夜気を顔にうけながら、杉はついこの間見た「六十年後之上海灘」といふ映画を想ひ出した。「略」それは映画製作者が頭脳をしぼつて仮想した未来の都市なのであろう。だがその未来の街の風景は、いま眼前にする月明のフランス・タウンにくらべ、何と田舎くさく、濁り、みじめなことであらう。月明とともに変貌した租界の街々には、もつと新しい、もつと未来的なものがあつた。シヨウ・ウインドやヴェランダや破風や門や石段や、各国の人々が様々に工夫をこらし家の部分々々が、それぞれ特殊の科学の意味を持つてゐるやうにさへ思はれた。

昼と違い、夜になると、月の光の下「フランス租界」には「も

つと新たなしい、もつと未来的なものがあつた」と描かれた。「各国の人々」の「家の部分々々」に注目することには、占領され、統一されたこの空間の中で、フランス租界を始めとして、多様性の現れが期待されている。

一方、芥川龍之介「上海游記」の中では、「仏蘭西租界」の印象について、問答の形で「西洋人の家は大抵駄目だね。少くとも僕の見た家は、悉下等なものばかりだつた」と語られていた。実際の風景に反し、「西洋人の家」といった租界の建築への印象は、強い違和感、嫌悪感としても捉えられる。¹⁷「西洋性」を拒んでいた芥川に対して、武田泰淳により描かれた「フランス租界」には融合性に基づくある種の「世界性」が呈示されていた。

四、徐家匯における徐光啓の墓

フランス租界のほか、「月光都市」では、徐家匯、特に徐光啓の墓について、少なからず描写されていた。しかも芥川龍之介「上海游記」において、「徐家匯」という地名はその中の一章のタイトルでもあった。「徐家匯」について、「月光都市」における描き方は改めて検討すべき要地があると思われる。

上海に来てから、「毎日様々中国人に接触」し、これまでの「研究」が「流れる汗と共にあとかたもなく消えて行く」と杉は感じていた。さらに「今まで日本の文学者の見出し得なかつたものを、自分で見出さなければならぬ。何か深い美しい感情で、この上海を新しく発見できないだろう」と杉は自分に言い聞かせた。杉は「徐家匯」の教会や孤兒院をまわって、「中秋節の頃」

に徐光啓の墓を訪れる。そのきっかけとなるのは、「様々な中国人」の中で、「閩姑娘」という「事務所の給仕」との出会いである。博士夫人など周りの日本人は、閩のことを「随分わがまま」で、「乱暴」な女性として捉えており、「事務所の評判」が悪い存在として描かれていた。一方、杉は「十九歳といふ年にしては子供じみて」、「無邪気なところもある」という閩の一面を認識してきた。加えて閩は「信仰を持ち」、「天主教の信者」であることがわかっており、「ほかの給仕やボーイを屈服させてゐた」彼女は、「杉の言ふ事は割によく守った」という閩の多面性も作中では描かれていく。このような閩に対して、杉は常に葛藤の心理を表していた。そもそも、杉と閩の関係は、キリスト教の聖書を通じて始まるものだった。聖書をめくっていた杉の姿を見て、「ひどくおとなしく、尋常であつた」という閩は、杉とだんだん親しんでいく。このような閩の多面性を理解するために、杉は徐光啓の墓に行くことにした。

「異国の宗教を上海の街にひろめた明代の新思想家徐光啓が埋められてゐる墓地を見ておく」ことについて、杉は「務めのやうな」気がして、それは「閩の問題やその他」を明らかにする「鍵」であると感じていた。中国におけるキリスト教の受容や、西洋科学技術の普及に大きな役割を果たした徐光啓（一五六二・四一六三三・十一）は、中国明朝末の学者、政治家である。イタリヤ人の宣教師マテオ・リッチの影響を受け、キリスト教のカトリック教派の信者になった。徐家匯は徐光啓の生誕地、その後の居住地であった。アヘン戦争後、フランスのカトリックの租借地として、大教会堂、図書館といった文化施設や孤児院もあり、この地

は、「西欧文化を取り入れる窓口」であった。¹⁸⁾

芥川龍之介は「上海游記」の中で、徐家匯を舞台にして、徐光啓が活躍していた「明の万暦年間」（一五七三～一六二〇）、キリスト教が弾圧された「清の雍正年間」（一七二三～一七三五）、そして「中華民国十年」（一九二一・大正十）いわば芥川が上海に旅行した時点という時系列で、三つの掌編劇を創り出した。一つ目は僧が「天主教」の宣教師に問答を挑みさらに如意をつかつて宣教師を打とうとするシーン、二つ目は首切りの災いを避けるため、村の娘が草原で拾った十字架を元の通りに埋めた後、信者の老人がそれを見つけて「黙祷」するシーン、三つ目は日本人観光客の四人と同文書院の学生の一人との計五人の日本人が、徐光啓の墓を見学しに行つて、写真をとるシーンである。以上のように、芥川龍之介は時代ごとにキリスト教の変遷と日本人からみた中国のキリスト教受容を描き出している。特に三つ目のシーンの最後に、観光地での記念撮影のように、徐光啓の墓と写真をとることは、西洋から伝わって来た中国のキリスト教の歴史に対して、日本人の無関心さが示されているといえよう。一方、武田泰淳は「月光都市」の中で、徐光啓の墓を次のように詳しく描写している。

赤煉瓦の巨大な尖塔の上に槍先のやうに冷く光つて立つ教会の銀色の屋根は、中世聖教のおもかげをしのばせてあるといへ、すでにあからさまに荒れはてた墓地を守るものではなかった。荒れはてたといふ感が杉を打つたのではなかった。荒れはてたより何より、誰一人訪ねる者もなく、秋の陽のあ

たためるままに、その墓地がおかれてある。そののびやかさ、そのあまりにもあたりまへな姿が、その日の午後の、街の市民の雑沓にまぎれて行く心をさそつたのであつた。

「荒れはてたといふ感」より、「誰一人訪ねる者もな」ということが「あたりまへ」である感じに、杉は心打たれている。「秋の陽のあたためるままに置かれた」徐光啓の墓は、一つの象徴として、キリスト教の歴史の深さを偲ばせるが、日本統治下の上海の人々にとっては忘れられた存在であつた。杉は「ローマ字であらはされた支那音」、「漢字にあらためられた欧州の信仰の形」が「面白かつた」と語られるように、その墓は、かつての上海で行われた異文化交流の賑やかな様子を思わせる。しかし、多面性を持った閩が「月光都市」の作中において、杉以外の周りの人間に拒否されたのと同様に、異文化の融合から生まれた多様性は、やがて日本軍の占領によって失われたのだということを暗示しているのであろう。

五、大世界^{ダスカ}

「月光都市」の中で、徐光啓の墓を訪れた後、杉は「大世界」に向かった。上海の大世界は、共同租界とフランス租界の境界にあり、一九一七年に開業した娯楽施設であつた。村松梢風『支那漫談』（騒人社、一九二八・五）の中で、大世界は「純粹に支那人のみを対照^{ママ}にして造られ経営されてゐる娯楽場」であり、その内部については「支那人のあくどい幻怪の趣味性が最も露骨に此

処の構造にも現れ」たのであると述べられている。「上海游記」など芥川龍之介の『支那游記』から影響を受け、村松梢風は一九二三年に初めて上海を訪れ、それ以降上海に関する作品を数多く発表していた。村松梢風によって、一九二〇年代から三十年代の戦間期で「魔都」という上海のイメージが形成されていた。大世界は一九三〇年代に入り、「売春、麻薬などさまざまな犯罪の巢」として悪名高い場所²⁰となり、まさに上海が「魔都」としてイメージされる場所でもあつた。「月光都市」の中でも、「低俗さ、馬鹿々々しさ、荒々しさがふくまれてゐた」、「邪教的な、又意欲的な俗悪さ」といった言葉で、杉の目から見た「大世界」が描かれていた。また「大世界」の中のさまざまな「屋内劇場」や「見世物小屋」、その風景や人々の様子も詳しく描写されていた。このような「大世界」に対し、杉は「抵抗」を感じた一方、「大世界の喧騒」を離れて、「あれらの人々が、この同じ月光下に暮してゐるといふ事実が、重大神秘の如く、ひしひしと彼の胸に迫つて行く」ということも感じていた。そして、ここで一つ見逃せないのは、「月光都市」の本文において、「大世界」は上海語の発音に基づき、「ダスカ」というカタカナで表記されており、また「大世界」からの帰り道の場面においては日本語のカタカナでなく、「Cilly Dany」など英語のそのままの表記も挿入されていたことである。つまり、「月光都市」に描かれた「上海」という空間は、日本語だけで統一されない言語の複数性を持つており、そのことが表記の問題によって強調されていた。²¹上海の「魔都」のイメージを多少継承しながらも、従来の文明対野蛮という図式に基づくエキゾチックな捉え方ではなく、あくまで一つの「民衆娯楽場」として

捉えている。つまり、「月光都市」において、武田泰淳は、「大世界」をその地にいる人びとの生活空間における多様性の体現という観点から描き出していたのである。

おわりに

「月光都市」の末尾、「大世界」からの帰り道、「支那家屋」の前で、中秋節の雰囲気を感じ取った杉は、その後、思いがけず閩と閩の父と出会う。この時、杉は「中秋節には、君のところでも紙銭を焚いたり、月宮殿を祭つたりするんぢやないの」と閩に尋ねている。しかし、返ってきたのは「いいえ、キリスト教はそんなことはやりません」という答えであり、その答えに杉は「何か強いシヨックで身体がすくみ、やがて顔がほてる」という状態に陥る。閩と閩の父は、「支那文化」研究者杉が抱いている中国伝統文化へのイメージには当てはまらなかったのである。要するに、日本人が「中国」を簡単に一枚岩で捉えられることは不可能であるという事実を、この結末は読者に突き付けている。

大正時代から始まった「支那趣味」ブームは、戦中にも続いていた。このような文明対野蛮、支配者对被支配者といった図式から捉えられてきた「中国」は、エキゾチシズムや植民地主義に満ちていた。そして敗戦直後、また「大陸の智慧の実を忘れかねる」という未練が漂っていた危うい時期に、「中国」を書くためには新しい方法が必要であった。芥川龍之介「上海游記」を始めとする従来の日本人作家の「中国」の書き方を、武田泰淳が特に意識していたことは、既に戦中の上海に滞在した時期から窺われる。

戦後になっても、この批評性は継続していた。しかし、戦中において「中秋節の頃」としていたタイトルを、戦後「月光都市」へ変更していたことは、泰淳の「中国」を書く方法に変化が示されていると考えられる。加筆された「月光都市」の冒頭部分で示されたように、「中秋節の頃」という伝統文化を重視する中国の詩節に限定した一日は、「戦時の異国の記憶」の中の「ある一日の印象」となり、物語の時間が相対化されていた。また「上海」という実在の都市空間は、「一つの象徴につつま高めてくれる秘力があつて」、「神々のことなどを想ひ起させる」というイメージを付与されて描かれ、象徴的な都市空間になっていた。タイトルを変更し、物語の時間と空間を抽象化することで、「月光都市」はある種の普遍性を持つようになったのである。武田泰淳は、戦後「月光都市」の発表によつて、「地方性」への描写を通して、「世界性」のある文学を実現するという新たな「中国」を書く方法を示していたのであろう。

*注…「月光都市」の本文引用はすべて初出雑誌『文芸復興』によるものである。

【注】

(1) 『武田泰淳全集 第一巻』(筑摩書房、一九七一年)の解題では、「月光都市」は「雑誌『人間美学』の昭和二十三年十二月に発表された」と記されたが、実際の初出は一九四八年一月に刊行された雑誌『文芸復興』である。『文芸復興』は一九四七年十二月から一九四八年三月まで、合計三冊(うちに二月、

三月は合併号)しか刊行されていなかった。編集兼発行者は金田一昌三、発行所は交友社、発売所は日産書房である。創刊号では、草野心平の詩や多田裕計のエッセインなどが掲載された。プランゲ文庫にも所蔵され、GHQより検閲の記録は残されているが、確認する限り、武田泰淳「月光都市」の本文に、取り消しなどの指示はなされていない。

(2) 松本陽子「武田泰淳『月光都市』論」(『阪大近代文学研究』大阪大学近代文学研究会、二〇〇四年三月)は、従来あまり注目されていなかった理由について、「武田の戦後の文学活動の出發と中国への罪悪感を結びつける捉え方に本作が当てはまらない」と述べている。

(3) 木田隆文「武田泰淳『中秋節の頃(上)』の周辺―日本統治下上海における法人文学界の状況」(『日本近代文学』第八十五集、二〇一一年十一月)、「〈中国的支那〉と〈西洋的支那〉のはざま―武田泰淳『月光都市』にみる上海建築」(『建築の近代文学誌』勉誠出版、二〇一八年)

(4) 一九四三年四月から一九四五年五月まで、『上海文学』はほぼ半年刊で、合計五冊である。上海文学研究会によって創刊され、現地邦人文学同人雑誌である。(趙夢雲『上海文学』解題、『戦前期中国関係雑誌細目集覧』三人社、二〇一八年、二三頁―二三八頁)

(5) 木田隆文「武田泰淳『中秋節の頃(上)』の周辺―日本統治下上海における邦人文学界の状況」により、「中秋節の頃(上)」にあたる「月光都市」の前半部分は本文の「それは上海のある中秋節のことであつた」から「まぎれて行く心をさそつ

たのであつた」までの内容であり、「中秋節の頃(下)」はおそらく「月光都市」の後半と同じであることを指摘している。

(6) 武田泰淳は一九四四年六月に中日文化協会上海分会附属東方文化編訳館主任として中国へ赴任し、上海で敗戦を迎えて一九四六年二月まで滞在していた。(川西政明『武田泰淳年譜』『武田泰淳伝』講談社二〇〇五年、参照)

(7) 第九十二号に続いて、戦後の『中国文学』は第九十三号から第百五号まで、十三冊の刊行(一九四六・三―一九四八・五)を継続していた。『中国文学』が復刊された当初、竹内好と武田泰淳はまだ中国に残っていた。その後、日本に戻った竹内は、『中国文学』の復刊に対して強く反対の意見を示していた。なお発行の出版社も倒産したため、内的要因に外的要因を加えて、雑誌は第百五号以降、廃刊の結末を迎えた。(立間祥介「戦後の中国文学研究会」『復刻中国文学別冊』汲古書院一九七一年、参照)

(8) 前二回は「最近の中国文学をめぐる(座談会)」(『中国文学』第九十七号、一九四六年七・八合併)、「鹿地亘氏に聴く、中国の文学運動(座談会)」(『中国文学』第九十八号、一九四六年九月)である。

(9) 各節のタイトルは『「世界性」の意味』、「ローカリズムと伝統」、「三つの『家』」、「巴金、茅盾、志賀直哉」、「『或る女』と『駱駝祥子』」、「旅行者と文学の実体」、「ポピュラリティと親近性」、「民族のか社会的か」、「落華生と宮本百合子」、「島木健作と文学の墮落」、「好きということ」、「外国文学に対する受け入れ方」、「魯迅の精神」、「恐怖観念と弱小意識」、「伝統への

「回帰」といったものである。

- (10) 林語堂は一九三六年アメリカに渡り、その前年アメリカで出版した『わが国土・わが国民』をはじめ、欧米に向けて中国文明を発信するなど一連の仕事をした。

- (11) 秦剛「芥川龍之介と谷崎潤一郎の中国表象——支那趣味」言説を批判する『支那遊記』『国語と国文学』（至文堂、二〇〇六年三月）

- (12) 引用は竹内好「五、造語法について」、「中国を知るために第一集」（『竹内好全集第十巻』筑摩書房、一九八一年）からであるが、初出は一九六三年六月に刊行された雑誌『中国』第五号である。

- (13) 木田隆文「〈中国的支那〉と〈西洋的支那〉のはざまで——武田泰淳「月光都市」にみる上海建築」（『建築の近代文学誌』勉誠出版、二〇一八年）では、「月光都市」に登場する「博士」は実際のモデルが存在し、作中の住居もほぼ現実に一致していることが指摘されている。

- (14) 高綱博文「第一章 上海日本人居留民社会」『国際都市——上海のなかの日本人』（研文出版、二〇〇九年、三十三—三七頁）

- (15) 高綱博文「第四章 日中戦争期における『上海租界問題』」『国際都市——上海のなかの日本人』（研文出版、二〇〇九年、一八六頁）

- (16) 前掲注（15）、一八八頁

- (17) 単援朝「芥川龍之介と中国における西洋・日本……中国各地の租界での体験を視座に」『跨境……日本語文学研究』第八号

（高麗大学校日本研究センター、二〇一九年二月）

- (18) 宮内淳子「徐家匯教会」、和田博文ほか編『上海の日本人社会とメディア1870-1945』（岩波書店、二〇一四年、二六七頁）

- (19) 石田仁志「上海『魔都』イメージの内実……村松梢風・井東憲から横光利一へ」『戦間期東アジアの日本語文学』（勉誠出版、二〇一三年）

- (20) 木之内誠編『上海歴史ガイドマップ 増補改訂版』（大修館書店、二〇一一年、一〇四頁）

- (21) 武田泰淳は、初期段階の中国文学研究会の例会（一九三五・三）で、「大衆語に就て」を題目に発表を行った。「支那語が如何に不統一であるか」が説明され、方言が特別視されていた。さらに同年の九月「言語研究部会」を設立し、言語への関心は早く窺われよう。

- (22) 「中秋節の頃」に先立って、武田泰淳は小文「城隍廟附近」も発表していた。秦剛の尽力によって、最近戦時下の上海で刊行されていた日本語雑誌『大陸』の存在が確認され、創刊号（一九四四・十）では、「城隍廟附近」が「上海景物詩」欄に発表されたことがわかる。「城隍廟附近」について、秦剛「武田泰淳の精神変容を見せる上海スケッチ」（『早稲田文学』二〇一八年春号、早稲田文学会、二〇一八年三月）は、泰淳が芥川龍之介「上海遊記」を相当意識していたことも指摘している。

（しゅう・きゆ 千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程在学）